



TITLE:

討論(II 体制と運営,基礎物理学研究所の将来と物理学,基研シンポジウム)

AUTHOR(S):

益川, 敏英; 三輪, 浩; 山村, 正俊

CITATION:

益川, 敏英 ...[et al]. 討論(II 体制と運営,基礎物理学研究所の将来と物理学,基研シンポジウム). 物性研究 1980, 34(2): 197-201

ISSUE DATE:

1980-05-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/90101>

RIGHT:

◎ International Conference on Cosmic Rays

1979	Kyoto	
1981	Paris	13-23 July
1983	(India ?)	

討 論

司 会 益川敏英，三輪浩，山村正俊

牧：私の話したことを要約すると、現時点で必要なことは、基研のシステムの中で、研究部員会議の機能、及び運営委員会の機能及び権限等について、再検討する必要があるのではないかということが一つ。それから基研の固有部門の役割について。基研という特色ある共同利用研の機能と結びついて、より積極的に、その存在意義なり役割が formulate されたことは、今までないのではないかと思うので、それをやる必要があるのではないかということです。

久保：昔のことを知っている方がおられるかと思いますが、広重氏の日本の科学史の中に、基研は Geist であるか共同便所であるかという議論がある。今、言われているのは、その議論の蒸し返しですね。

それで Geist が出来たのか共同便所になったのかですけども、まあ両方であるので…。

牧：Geist であるか共同便所であるかというような広重氏の発想は果して良いのでしょうか。

久保：いや、良いのかどうか…。

司会：提案があります。時間が少ないので、ここで結論を出すというよりも、問題点を整理した方が良いと思う。

午前からの話の中で、組織というのは、20～30年経てば、当然、再編成を必要とされるものだということが、またそれとの関連で、固定化、或いは形骸化しているということが言われた。しかし必ずしもその内容が具体的に指摘されていないので、その内容をもう少し詰めたい。

話の中であげられていた、部員会議が研究計画を決定していく際、自由に機能していないので、それに対する創造的な手を考えるというのは、具体的な提案だ。もう一つ、牧さんの言われた固有部門の役割についても明確な提案で、これから時間をかけて議論していけば良い。

従って、前者、再編期に來ているということの内容をここで集中的に議論したら良いのではないかというのが提案です。

小沼：その前に山口さんの発言を support したい。山口さんのお話は、基研、核研、KEK で議論され

討 論

ていた国際化以上のものを含んで居り、それを実現するには、場合によっては国立大からはずして運営も international にするぐらいのつもりでやらなければならないだろう。これは基研がそれになるかどうかということとはすぐには結びつけなくても考えるに値する問題だ。

山口： 研究所間の密接な交流があって共同事業として国際交流がやれるという方が望ましい。日米だけでなく、近くに重く遠くに緩いぐらいの全方位にしたい。

位田： 前半の再編成の問題は大きな問題であと 15～20 分で議論出来るとは思えないので、むしろ後半の具体的な問題を議論した方が良くと思う。それで宣しければ一言、言いたい。

司会： 先程、言い落したことがあるので、それを加えて位田さんの問題に入りたい。それはアトム型の受け入れ側と来る側の問題が指摘されたこと、それに、かつては基研だけであったが、現在は幾つかの研究所が出来、また、基研自身も 20 数年間整理されてきた中で起っている問題なので、昔の部員会議が良かったからそれと同じように再編しようというのではならず、もっと発展的に考えるべきだということが述べられた。

私が先程提案した理由は、再編というのは重要な問題であるにも拘わらず、feeling として述べられただけなので、具体的に指摘すべきだと思ったからだ。feeling だというようなら、それは今後詰めていくことにして、位田さんの問題に入っても良い。

田中(一)： 再編成という問題について一言。四分の一世紀過ぎたから再編成する、或いは、幾つかの困る点が出て来ているから再編というのは、一応よく言われることですが、長い間運営してくると確かにいけない点が出て来るのですが、それと同時に、当初予期していなかった良い点も出て来る。その新しい芽を如何に生かすかという形で次の在り方を考えていく、その結果としてまずい点がなくなっていくという考え方を取らなければ、具体的な再編成の方向は考えにくいのではないか。

もう一つ基研がこれから直面する問題を指摘したい。それは各大学の staffs の平均年令が高くなってきているということです。staff の平均年令が高くなってくると、共同利用研の activity を支える点で十分でなくなるだけでなく、若い人が欠けてくるという点でも重要な影響をもってくる。しかもそれが、基研の今までの運営によって出て来たのではなく、外側の要因で出て来ているということが、これからの基研を考える上で、一つ大きな点だと思う。

中野： 渡部さんの話に関して。私は、物性は基礎物理でないかのような感じをもっていたが、この頃はそうは思っていない。物性から出て来る概念も実に基礎的で、素粒子論や、全ての物理観の基礎になっているものがある。先程、物性理論をやめたら良いのではないかという意見もあったが、むしろ、基礎物理研究所なら、その中に物性理論がないのはおかしい。理論をやるのに、外国の実験をみていれば良いというのなら別だが。

それと多少、関連して。昔、私がいた名大の物理教室は、非常に漸新な運営方式をとっている。しかし運営は各グループ共通の基盤でやっているが、研究の面ではそうではない。基研も、全てを基礎物理という観点でやっていこうという理想の割には、何本かの柱が独自性を持ち過ぎているのではないか。

原(康)： 基研が良くなる為には、良い先生が来たいというような研究所にすることが重要で、制度も

そうなるようにすべきだ。現在の基研に、研究条件のそれ程悪くない大学から、良い人が来る気がしない。今朝小林先生がおっしゃったけれども、プリンストンに魅力があったのは、Dyson, Yang が居たからだ。再編成は、そういう見地から考えて載くよう、運営委員の方をお願いしたい。

久保： 体制だけの問題ではないですね。今の困難な状況は。

司会： それでは位田さんお願いします。

位田： 前半の session で分野間の繋が非常に密接になっているというお話があったが、その面で基研が果さなければならない役割は大きい。しかし必ずしも今の状況は、満足すべきものではない。例えば、素粒子の閉じ込めをやっている人にとって、統計物理と素粒子の合同の研究会が基研で開かれることは望ましいことだと思うが、それでは世話人の一人になって提案することを考えるとためらいが大きい。今まで、そういう研究会が必要であるにも拘らず開かれなかったということの原因はどこにあるのか。研究会の持ち方ということでは、そういうものを出来るだけ encourage することによって新しい category を設けることも考えられるのではないか。こういうことは今でも可能だし非常に必要な時期ではないかと思う。

吉川： 所内の方が遠慮しなければならぬ雰囲気ならば、それは基研にとって不味いことだ。核研ではずい分皆んな威張っていますが、我々は少しも不便を感じない。この方も全国の研究者の公僕という態度ではなく、ここで物理をやるんだという態度でやって載きたい。それも、部員会とか委員会とか外から関与する機会が多過ぎるのではないか。研究部員会でも、研究会に予算をどう配分するかが実質的な仕事、それ以外の報告は他の所で見ようと思えば見える。

位田： 吉川さんの意見は誤解。私は所員の立場としていったのではなく、研究者の一人として言った。実際他の人からもそういう研究会の提案がなかった。研究会の決め方に、そういうものを持ち出すことに対する抵抗感を感じさせるものがあるのではないかということに心配した訳です。

佐藤： 牧さんが言われた固有部門の独自性の問題と、位田さん、吉川さんの話は同じ問題だ。しかし共同利用の機能としての研究会とかアトム型というものの運営の仕方は、ある意味で判り易い問題で一方の固有部門の役割などと言うのは、湯川先生が居られた時代はある意味をもっていたかも知れないが、その後は、基研の中ではっきりさせないで来た問題だ。昔、早川さんが言われたように、湯川先生の番頭と表現されるような所員というのがあった。もう仕える人が居ないのに、そういう言い方だけが残ってくると公僕みたいなことに……（笑）。

中野さんが言われたように、基礎物理というのは広い。しかし、それらの分野の一般的なセンターということではなく、基研ではある特定の研究が遂行されているというようなことがあっても良い。しかしそのとき、固有部門の役割は単なる公僕であるのか、或いは Geist を漂よわせる為の、Hard core なのかというあたりが私には明確でない。

もっと現実的に言うと、将来計画で問題になるのが、その点だ。unique なものを創って行く為の共同利用だということで、人が要するという話になると、理論物理学者は各大学に2ケタ程も居るのに、基研で1~2名増えても negligible ではないかと。だから、一層のこと、完全に共同利用の為のセンターだと言い切れば、共同研究の為の予算というだけで考え易い。しかしそのように、割切

討 論

並木： ることもできない。位田さんは研究会の決め方の問題だと言われたのですが、所員の問題に跳返る面がある。始めの頃を思い出してみても、木庭さん、早川さんは、公僕でございますという顔をしていなかった（笑い）。むしろ基研の教授は大分人使いが荒いものだという印象を持っていた。それが共同利用研としての基研の性格を初期に於て、決めてきたのではないかという気がする。この研究については自分が引っぱって行くんだという人が居なかったら、本来の意味の共同利用研にはならない。もしそれが出来ないとしたら、また、出来ないことの体制上の障害を、もし所員の方が身にしみて感じて居られるなら、それをはっきりおっしゃって載きたい。

末包： 我々が早くやれば出来ることだと思うが、運営委員会の平均年令をせめて30代近くに下げるべきではないか。若い人達が研究の中心であるならば、その人達に、研究グループをどう運営していくかということを考えさすべきだ。僕等は基研と一緒に育っているが、今の若い人は基研はあるものとみている。そういう人達が、あるものとしての基研を自分達のものとしてどう運営するかはかなり違うと思う。また、それぞれ、大学運営のしがらみの中で限界を十分知り尽している人よりも限界を知らない若い人達が、自分達のやりたい事を実現したいと考える中で、新しいことが出てくるのではないか。

司会： 重要な指摘が続いていますが、時間がありませんので、あと2～3名の方で打ち切りたい。

岩崎： 僕は、今、末包さんがおっしゃったようなことについては反対したつもりだ。というのは毎回研究部員選挙では、若手代表が、断然トップで当選している。だから、ただ若い人を送り込めば問題が解決するという段階ではない。25年間経過するとちょっとしたことでも変えるのは難しい。例えば10年間続いた研究会を一度止めたかどうかという提案があってもそれは通らない。位田さんのおっしゃった研究会の問題も深刻な問題だ。例えば、宇宙の baryon 数が問題になっているときにここには宇宙物理と素粒子が揃っているにも拘らず、実際に研究会が行われたのは KEK であった。そういう研究会が出来なかったということには、どこかに問題があるので、こういうことは、ただ年令層を変れば良いということだけでは解決しないということを強調したいと思う。

末包： 僕の言ったことを大分誤解されている。若手と古手が独自に運動するようなことがなくなるようにすべきだと思う。難しいことは、運営委の人にやって貰えば良いが、難しいということを知っている人は最初からやらないので、それでは進まない。知らない人の方が積極的にやれる。

大槻： 位田さんの意見について。理論物理学者は45才を過ぎれば週2日位は、自分の専門外のことを勉強しろということをおっしゃっている先生があるんですが、研究会をやるときにも似たようなことが言えることは確かだ。基研には、そういう下勉強をやって出てきたときに、それに対する寛容さというものがまだあると思う。KEK で baryon 数の研究会が出来たのは結構だが、逆に今度は外から申し込みにくいということが現実にある。その意味では、基研のもっている寛容さは良いことであって、そういうものをもっと前進した形でどう定着させるかという方向で考えたいと思うし、そういうことで、山口さんのおっしゃったようなことも発展して行けば良いと思う。

西島： 25周年で研究部員会をどうするかという問題が出ていますが、僕の記憶では5年目に同じことが既に出ていた。先程、小林先生が言われましたように、研究部員会というのは会議部員会です。

従って、研究と余り関係がないので、これを経済的にやるには、研究部員を立候補制にする。立候補するには政策がなくてはならないから、政策として研究会を propose する。つまり、研究部員というのは研究会の Leader 或いは提唱者が立候補してそれに投票すれば一度に色々なことが決まって会議の数も減るので良いのではないかという話が、5 年目に出たということだけお伝えしておきます。

牧： baryon 数の研究会の例について。吉村氏が基研の研究会に来られたとき、そういう話は particle-astrophysics と呼ぶべき新分野だから、この次にでも基研の研究計画に提案してはどうかと勧めた。私自身も所員の役割とか、色々な慣習に沿えば、問題を提起した人が、進んで研究部員会に提案すべきだと思っていた。しかし、部員会議には、そのとき提案がなく、たまたま KEK がこの問題を取り上げた。何処でやっても良いと思うが、基研が臨機応変にやれなかったことについては、慣習のもっている system 的な欠陥の一つの例だと感じた。

高木(富)： 研究会提案について。あるテーマの研究会があっても良いと色々な人が考えていても、具体的に世話人をかって出るような人が居なければ、実現されない。だから希望の多い色々なテーマを、例えば、募集する。しかし世話人は別ということが、一つの方向として考えられるのではないか。

司会： かなり重要なことが議論されたので、これを、部員会、議長団、或いは将来計画委員会等、適当な所で問題を整理し、このまま議論のしっ放しではなく、必らず何らかの形で答を出し、それに対応する案を作って実行するという決意のもとに、時間がありますので、この討論を終わりたいと思います。

以 上